# 修正日本文法教科書

文部省檢定濟

大槻文彥著　上

375.9
Ot21
資料室

30329
教科書文庫
3
815
41-1901
20000
18314

資料室
375.9
062

文部省檢定濟

明治三十四年九月二十六日　中學校用

文學博士　大槻文彥著

# 修正日本文法教科書

廣島高等師範學校
大學圖書之印

東京
大阪

開成館藏版

廣島大學
教
18314
圖書



## 例言

本書は、中等教育程度の諸學校の教科書に充てむとて、國文法の大要を說きたるものなり。されば、編輯の體裁も、學習すべき生徒の學力の度に基きて、實地教授上の便利を謀り、叙述引例等を極めて平易にして、專ら教科用に適切ならしめむと勉めたり。

本書を編輯するにつきて、特に意を用ゐたる廉々、左の如し。

一、教授法の示せる所に據りて、一新事項を授けむとするには、いづれも、初に、例を擧げて、後に、定義法則を教へ、終には應用すべき練習題の一斑を與へたり。

二、書中の引例は、學ぶ者の常に耳目に馴れたる卑近なるを旨とし、專ら中等程度の諸學校の下級に用ゐらるゝ各學科教科書中の語句より、多く材料を採り、その間には、口語、または、書翰文

體なるをも交へたり。歌句を引用することは、勉めて避けたれど、その人口に膾炙せるもの、又は、學生の、小學校このかた、學び來れる唱歌の語句の如きは、採て處々に加へたり、聊、趣味を添ふるに足らむか。

三、例題の中に、聊、漢文なるをも加へたるは、學生が習ひ得たる國文の法則を、漢文訓點の上に應用して、一層、國文法の運用を資けむとてなり。

四、綴文の題を、處々に挿みたるは、習ひ得たる文法の智識を、明確ならしむるに、必要なる方法ならむ、とも思ひ、又、これによりて、今の國語教授上にありがちなる、讀書と作文とかけはなるゝ弊を濟ふべき助とならむ、とも思ひてなり。

五、此種の教科書にては、例題の選擇に最も注意すべきは、いふまでもなし、書中、各章の終に載せたる例題の如きは、悉く、學ぶ者





の習得し來れる智識に據りて、自ら發明して解し得べきを度としたり、第一章、乃至、第八章の諸題に、轉成の品詞、熟語等をまじへざるが如き、その一例なり。

六、動詞形容詞の活用等を說くに先だちて、熟語、疊語、接頭語、接尾語等を說くべき必要あるが如し。さるは、今の言文の、いかに平易なるものとても、是等の熟語等を含まぬは、いと稀なれば、品詞に續きて、これらの事を說かずば、品詞の類別、十分に辨へ難かるべければなり。されば、本書は、第一章、乃至、第八章に、品詞を、箇々に說き、第九章に、これを結合して、こゝに、品詞、相互の轉成を授け、第十章にて、熟語、疊語、接頭語、接尾語を教へて、こゝにて、國語の種類の說明を、一わたり了ふることゝせり。かくすとも、學ぶ者の類化力の上に、聊も障ることあらざるべし。

七、動詞、形容詞、助動詞、且爾乎波、感動詞の五品詞を、いはゆる循環

教授法によりて、更に、稍、詳に說きたるは、その用法、特に誤り易きものあればなり。

八。動詞、形容詞、助動詞の語尾活用と、相互連續の法とは、文法を學ぶ者の、最も善く諳んじおくべきものなれば、特に、簡明なる表數葉を添へたり。

九。本書を、上下二卷に分ちたるは、敎材の分量によりて然せしにてこれを、如何に學年に配當すべきかは、敎ふる人の運用に一任せむとす、

余が著作に、別に、廣日本文典、同別記といふものあり、更に詳に文法を說きおけり、此書につきて解しかぬる事もあらば、其二書を參考すべし。又廣日本文典と、此書と、說の異なりたるところもあり、そは、此書の跋文に辨ずべし。

# 修正日本文法敎科書上卷目次


總說……一頁
音韻篇……二
第一。假名……二
第二。音の變轉……一〇
第三。假名遣……一五
第一章。名詞……一七
第二章。動詞……一九
第三章。形容詞……二一
第四章。助動詞……二三
第五章。副詞……二四
第六章。接續詞……二六
第七章。豆爾乎波……二七
第八章。感動詞……二九
第九章。品詞……三〇

第十章。熟語。疊語。接頭語。接尾語。……三三
第十一章。動詞の用方。……四一
第一節。動詞の性。……四一
第二節。動詞の活用。……四四
第三節。動詞の法。……五三
第四節。動詞の誤。……六四
第十二章。形容詞の用方。……六九
第一節。形容詞の活用。……六九
第二節。形容詞の法。……七一
第三節。形容詞の誤。……七八
第十三章。單文。……八〇
第一節。主語。說明語。……八〇
第二節。客語。……八三
第三節。修飾語。……八六
第四節。倒置句。……九二

修正日本文法教科書上卷目次終

廣島大學圖書之印

修正日本文法教科書上卷

## 總說

言葉　人の聲の意味あるものを言葉といふ。人は、言葉によりて、その心を口に述ぶ。言葉を述ぶるに法あり、人々、その法によりて、語り合ひて、互に能くその心を通はす。

文字　言葉を物に書きつくるしるしを文字といひ、書きつらねたるものを文章といふ。言葉に法あるが故に、文章にも法あり、その法を文法といふ。

文章

文法

# 音韻篇

## 第一。假名。

假名

我が國の音を寫す文字には、假名といふを用ゐる。假名に、二種あり、片假名と平假名となり。

片假名五十音圖

片假名の形は、次の如し、通例、左の五十音圖といふものにて記さる。

| | 阿段 | 伊段 | 宇段 | 衣段 | 於段 |
|---|---|---|---|---|---|
| 阿行 | ア | イ | ウ | エ | オ |
| 加行 | カ | キ | ク | ケ | コ |
| 佐行 | サ | シ | ス | セ | ソ |
| 多行 | タ | チ | ツ | テ | ト |
| 奈行 | ナ | ニ | ヌ | ネ | ノ |
| 波行 | ハ | ヒ | フ | ヘ | ホ |
| 末行 | マ | ミ | ム | メ | モ |
| 也行 | ヤ | イ | ユ | エ | ヨ |
| 良行 | ラ | リ | ル | レ | ロ |
| 和行 | ワ | ヰ | ウ | ヱ | ヲ |





行段

右の圖の、縦の五音を行といひ、横の十音を段といふ。各行各段ともに、そのはじめの音を取りて名とす、阿行、加行、佐行、多行、または、阿段、伊段、宇段などの如し。

母韻　子音

阿行の五音を母韻といひ、餘の九行の四十五音を子音といふ。子音を長く引きて言へば、母韻となる。

右の中にて、阿行の「イ、ウ、ェ」と、也行、和行の「イ、ウ、ェ」とは、形同じ、されば、假名の數、實は四十七なり。

平假名
いろは歌

**平假名**の形は、次の如し、通例、左の**いろは歌**といふものに記さる。

いろはにほへと
ちりぬるを
わかよたれそ
つねならむ
うゐのおくやま
けふこえて
あさきゆめみし
ゑひもせす

別體の平假名、尙、多し。

五十音の外に、濁音、半濁音といふものあり。

濁音

**濁音**の數、二十あり、五十音の加行、佐行、多行、波行の假名に二點を加へて記す、左の如し。

ガ　ギ　グ　ゲ　ゴ
ザ　ジ　ズ　ゼ　ゾ
ダ　ヂ　ヅ　デ　ド
バ　ビ　ブ　ベ　ボ

半濁音

**半濁音**の數、五あり、波行の假名に、圈點を加へて記す、左の如し。

パ　ピ　プ　ペ　ポ

清音
拗音

濁音、半濁音の點なきときの假名の音を**清音**といふ。

右の外に、**拗音**といふものあり、也行、和行の假名を、他の清音、濁音、半濁音の假名に合せて記す、左の如し。

| | | |
|---|---|---|
| キャ | キュ | キョ |
| ギャ | ギュ | ギョ |
| シャ | シュ | ショ |
| ジャ | ジュ | ジョ |
| チャ | チュ | チョ |
| ヂャ | ヂュ | ヂョ |
| ニャ | ニュ | ニョ |
| ヒャ | ヒュ | ヒョ |
| ビャ | ビュ | ビョ |
| ピャ | ピュ | ピョ |
| ミャ | ミュ | ミョ |
| リャ | リュ | リョ |





直音

クヮ
グヮ

この「キャ、」「キュ、」「キョ、」「ギャ、」「ギュ、」「ギョ、」などに對して「カ、」「ク、」「コ、」「ガ、」「グ、」「ゴ、」などを直音といふ。

以上、濁音、半濁音、拗音を平假名にて書くにも、これに倣ふ。

例。　わらんべ(童)。　よんて(讀而)。　ゆゑん(所以)。
　　しんぶん(新聞)。　くわんり(官吏)。

鼻聲

右等の「ん」を鼻聲とす。鼻聲は他の音の下に限りて發す。

片假名にては、「ン」を用ゐる。

促聲

例。　やっこ(奴)。　ほっす(欲)。　もっとも(最)。　しっけい(失敬)。
　　ざっし(雜誌)。　せっつ(攝津)。　くわっぱつ(活潑)。

右の如く、假名の間に、右にかたよせて、小く記せる「つ」を、促聲

とす。この聲は、他音の間に限りて發す。片假名にては「ッ」を用ゐる、「コップ」(高盃)、「マッチ」(燐寸)の如し。

例。ビール(麥酒)。　ボート(短艇)。

右等の「ー」は、上の假名の音を、長く引きて呼ぶを示す、これを**長呼音符**とす。片假名、平假名、共に同じ。

長呼音符

例。チチ(父)。　ははは(母)。　イロイロ(色色)。　さまざま(樣樣)。　オソルオソル(恐恐)。　ところどころ(所所)。　ツメカケツメカケ(詰掛詰掛)。

右の如く、同じ假名を重ねて記すときに、下の假名に代へて、

チヽ、　はゝ、　イロ〳〵、　さま〴〵、

オソル〳〵、　ところ〴〵、　ツメカケ〳〵、

の如く、一字には、片假名に「ヽ」を、平假名に「ゝ」を用ゐ、二字以上には、片假名、平假名、共に「〳〵」を用ゐるを、**踊字**といひ、その濁音なるには、濁音の點を加ふ。





### 演習例題

一、平假名にて、五十音圖を記せ。

二、片假名にて、いろは歌を記せ。

三、平假名にて、濁音、半濁音を記せ。

四、平假名にて、次の語の音を記せ。

勅語。食物。御者。百尺。珠玉。旅宿。茶屋。

五、平假名にて、次の語の音を記せ。

漢文。春暖。金魚。山脈。蒟蒻。願書。電信局。

六、片假名と平假名とにて、次の語の讀方を記せ。

專ら。全し。四日。服部。鷺。出席。關課。

七、次の語を平假名にて記せ。

耳。世世。加賀。屢。李。東雲。賑賑し。

八。長呼音符を用ゐるべき語、五つを記せ。

## 第二。音の變轉。

音の變轉

假名の原音を、他音に變じ、又は、二音を、一音に約むることあり、これを音の變轉とす。

例。こ(小)きく(菊)＝こぎく。　やま(山)さくら(櫻)＝やまざくら。　みか(三日)つき(月)＝みかづき。　ひ(火)ばし(箸)＝ひばし。　なに(何)ひと(人)＝なんぴと。　ま(眞)ひら(平)＝まっぴら。

連濁

右の如く、二語を連ねて呼ぶときに、下の音の清音なるを、濁音、又は、半濁音に變ずること多し、これを連濁といふ。

例。しかあり(然有)＝しかり。　ゆかずあり(不行有)＝ゆかざり。　まれにあり(稀有)＝まれなり。





約音

右の如く、「あ」の音の、上の音と約りて一音となること、常にあり、これを約音といふ。

例一。ひらきて(開而)＝ひらいて。　およぎて(泳而)＝およいで。　をしきかな(惜哉)＝をしいかな。

例二。うれしくおもふ(嬉思)＝うれしうおもふ。　おなじくす(同)＝おなじうす。　とひて(問而)＝とうて。　こひて(請而)＝こうて。

音便

右の如く、發音の便に隨ひて、「き」、「く」、「ひ」等を、「い」、「う」に變ずることあるを、音便といふ。この音便は、「イ」、「ウ」の二母韻に限る。

音便には、尙、次の二種あり。

例三。　よみて(讀而)＝よんで。　まなびて(學而)＝まなんで。　しにて(死而)＝しんで。

右の如く、原音を鼻聲に呼びかふることあり。

例四。　むかひて(向而)＝むかって。　うりて(賣而)＝うって。　うちて(擊而)＝うって。

右の如く、原音を促聲に呼びかふることあり。

すべて、音便は、一語の首に發せず。

例一。　かは(川)＝かワ。　うるはし(美)＝うるワし。　あたひ(價)＝あたイ。　たひら(平)＝たイら。

ゆふべ(夕)＝ゆウべ。　こふ(請)＝こウ。

いへ(家)＝いエ。　かへる(蛙)＝かエる。

しほ(鹽)＝しオ。　おほし(多)＝おオし。



右の如く、「は」、「ひ」、「ふ」、「へ」、「ほ」の、他の音の後にあるときは、「ワ」、「イ」、「ウ」、「エ」、「オ」の如く、轉じて呼ぶこと多し。

例二。　かうべ(首)＝コうべ。　こたふ(答)＝コトふ。

かなふ(適)＝かノふ。　とらふ(捕)＝とロふ。

てうづ(手水)＝チョうづ。　けふ(今日)＝キョふ。

うれふ(憂)＝うリョふ。　ゑふ(醉)＝ヨふ。

右の如く、阿段と衣段との音は、その下「う」、又は「ふ」の「う」の如く轉じ呼ぶものに接すれば、於段の音の如く轉じて呼ぶこと多し。

以上二例の如く、假名を、その原音のまゝに呼ばずして、他の音に轉じて呼ぶを、轉呼音といふ。　轉呼音は讀むに呼ぶのみにて、原音の假名を書きかへず。

轉呼音

## 演習例題

一、次の語の讀方を、片假名にて記せ。

竹垣。山口。離島。火攻。戸棚。高殿。釣舟。遙遙。

二、次の語の讀方を、平假名にて記せ。

朝霧。眉毛。子猿。紅染。望月。櫻花。世捨人。輕輕し。

三、次の語を、音便にて呼びかへよ。

かみべ(神月)。つきたち(朔)。はゝき(箒)。ひむか(日向)。さぶらふ(候)。かりびと(獵人)。かみかき(筭)。とひて(問面)。

四、次の語を、音便にて呼びかへよ。

とみた(富田)。かみさし(簪)。おもひはかる(慮)。めとり(雌鳥)。もはら(專)。またく(全)。

五、次の文の、假名のあやまりを正せ。

赤ひ花の美しゆ咲ひたる樹を買ふて來よ。

今出で行いたるは、しんはし(新橋)こうべ(神戸)間の急行列車なり。

さひつ頃、かの地を去て、海岸に沿ふて旅行し、本月よおか(八日)この地に着きもおし候。

## 第三。假名遣。

例一。

あは(粟)、　あわ(泡)。　かひ(貝)、　かい(櫂)。

すふ(吸)、　すう(据)。　はへ(蠅)、　はえ(鮠)。

例二。

いほり(庵)、はおり(羽織)。こたふ(答)、いとふ(厭)。

ねる(居)、　いる(射)。　ゑ(繪)、　え(江)。

をば(伯叔母)、　おば(祖母)。　はぢ(耻)、　はじ(櫨)。

くづ(屑)、　くず(葛)。

右の例の一なる、「は」、「ひ」、「ふ」、「へ」、「ほ」、「たふ」などは、轉呼音にて、「わ」、「い」、「う」、「え」、「お」、「とふ」などゝ相紛れ易く、例の二なる「ゐ」、「ゑ」、「を」、「ぢ」、「づ」などは、その正しき音、今は殆どすたれて、「い」、「え」、「お」、「じ」、「ず」などゝ相紛れ易し。かゝる紛れ易き音を辨へ知りて、その正

しき假名を書き分くるを、假名遣といふ。

およそ、假名遣の紛れ易きは左の如し。

| | | | |
|---|---|---|---|
| ―わは | じぢ | かくわ | |
| いゐひ | ずづ | がぐわ | |
| う―ふ | じぁ | ぢぁ | |
| えゑへ | じゅ | ぢゅ | |
| おをほ | じょ | ぢょ | |

その他は、前に擧げたる轉呼音の「かう」、たふ」、なふ」、らふ」、てう」、けふ」、れふ」、ゑふ」の類なり。すべて、假名遣の紛ふべきものは、辭書にてその語をもとめて、その假名遣に從ふべし。



## 第一章。名詞。

例一。櫻の花は、春に咲く。

例二。勉强は、幸福の母なり。

右の二例の中の「櫻」、花」、春」、勉强」、幸福」、母」、などは、いづれも、物事の名をいふ語なり。これらの語を名詞と名づく。名詞は、「が」、「の」、「に」、「を」、「と」、「へ」、「より」、「まで」、等の語に續く。

次の諸文の中にある名詞を指し示せ。

一。雞の聲きこえて、夜明けたり。

二。夏には、川にボートを浮べて遊ぶ者多し。

三。菜の花や、月は東に、日は西に。

四。ランプ行はれてより、行燈を用ゐる家少し。

五。われは、かれより、昨日の會の樣子を聞きたり。

代名詞

この文の中の「われ」、「かれ」は、いづれも、名詞の代に用ゐらるゝ語にて、これらを**代名詞**と名づく。名詞の一種なり。

六。これは、おのれの書にあらず。誰の品なるか。

七。いづこよりともなく、梅の香のかをる。

八。この籠の中に、何があるか。三つの柿と、二つの梨とあり。

數詞

この文の中の「三つ」、又は、「二つ」といふ語も、名詞の一種にて、**數詞**といふものなり。

九。僕は、一つの珍しき器をもてり。君の鑑定を請はむ。

十。黄海のいくさにて、敵はその艦五つを失ひしに、われは、悉く無事なりき。

十一。この題、十五あるがなかに、末の五つは、稍解きがたし。

十二。けふの運動會に、われ、汝には負けたれど、西田と北野とには勝ちたり。



十三。わが兄は、東京にありて、そこなるをぢの家より、ある學校へ通ひて、專ら法律學を修めてあり。

十四。光秀は、秀吉と山城の山崎に戰ひて敗れ、落ち行く路の小栗栖にて、ある農民に殺されたり。

十五。咲きにほふ、山の櫻の花の上に、かすみて出でし、春の夜の月。

**名詞は、すべて、物事の名をいふ語なり。**

## 第二章。動詞。

例一。生徒は、書を讀み、字を習ふ。

例二。風吹きて、燈火消ゆ。

例の一なる「讀み」と、「習ふ」とは、共に、「生徒」の有意の動作をいひ、例の二なる「吹き」と、「消ゆ」とは、各、「風」と「燈火」との、無意の作用をいふ。これらの語を**動詞**と名づく。

次の諸文の中なる動詞を指せ。

一。學を修め、業を習ふ。
二。笑ふ門には、福來る。
三。柳のかげに、遊びてうたへ。
四。讀書を好む人あり。

右の中の「あり」などは、有樣をいふ語なれど、これも動詞なり。

五。屍は朽ちて骨となり、又は折れて露結ぶ。
六。夜に入りて、花火などあり。
七。かれにあはゞ、知ることを得む。
八。日全く暮れたれば、暇を告げて出でぬ。
九。雨はやみしかど、烈しき風起りて、船しば〳〵覆らむとす。
十。倫敦にて中山君にあひし由、かの地より歸りし人、われに語りぬ。
十一。承れば、この度の試驗には、貴所優等賞を受けさせられし由、大慶に候。
十二。われは、朝顏のくさ〴〵の種をもちてあり。望む人あらば、與へむと思ふ。
十三。鈴の鳴る音聞ゆ。汽車は、程なく走り出でむ。
十四。怠らず、はげめ使はぬ桶は漏り、といふ句あり。
十五。心だに、誠の道に、かなひなば、いのらずとても、神やまもらむ。

動詞は、物事の動作をいふ語なり。

## 第三章。形容詞。

例一。高き山の麓に、廣き野見ゆ。
例二。かの筆は好く、この墨はわろし。

例の一なる「高き」と「廣き」とは、各、「山」と「川」との狀態を形容し、例の二なる「好く」と「わろし」とは、各、「筆」と「墨」との性質を形容す。かゝる語を、すべて、形容詞といふ。

次の諸文の中にて、形容詞を求めよ。

一。櫻の實は、未熟なる間は青けれども、熟すれば、赤し。
二。水至て清ければ、魚なし。
三。善をするが最も樂し。
四。琉球の島島には、水乏しきが故に、米を產ずること少けれど、甘藷は夥し。
五。かゝる涼しき遊は、他にまたとあらじ。
六。父母の恩は、山よりも高く、海よりも深し。
七。日本は、島國なれば、緯度の同じき大陸の地方よりは暖し。
八。美しき景を觀むとて、遠き近きより來る者多く、その數計り難し。
九。春前に雨ありて、花の開くこと早く、秋後に霜無くして、葉の落つること遲し。
十。かの人の、弱きを扶けて強きを挫く風ありしは、人情の紙よりも薄き今の世には珍しとて、親しきも、疎きも、貴きも、賤しきも、老いたるも、わかきも、その死を惜まぬはなし。



助動詞

形容詞は、物事の有樣を形容する語なり。

## 第四章。助動詞。

例一。われは習ひき、されど、今はおぼえず。
例二。明日來むとて、友は歸りぬ。

例の一なる「き」、「ず」、例の二なる「む」、「ぬ」は、各、「習ひ」、「おぼえ」、「來」、「歸り」、などいふ動詞に添ひて、その意義を補ひ助くるものなり。これらを助動詞といふ。

次の諸文の中より、助動詞を求め出せ。

一。友は、村人に迎へられて、おのが家にぞかへりける。
二。君のこの地を去りしは、惜むべし。
三。壁などには、半までも、水のつきたるあと見えたり。
四。余は、今昔の感に堪へずして、一篇の文章をつゞらむと、病をおして筆をとりつ。

五。聯合軍の、太沽の砲臺を陷れし時、白石大尉は、先登第一たりき。

此の文中に見ゆる「たり」は、「第一」といふ語に添ひたれど、これも助動詞なり。「き」は、また、その「たり」に添ひて、その意義を助けたるなり。助動詞は、かく、他の助動詞にも附き、稀には、その他の語にも附くなり。

六。和氣洋洋たるうちに、憲法發布の大典を行はせられぬ。

七。かれより招かれたるに、われ行かずば、かの機嫌を害はむ。

八。旅客は、出札口を退かるゝ前に、つり錢と切符とを改めらるべし。

九。御申越の書籍は、私手許に持合はせず候まゝ、そこゝの書店にてさがしたれど、はや賣切れし由にて、再版出來の期は、わからず候。

十。秋の日は、山の端近し、暮れぬ間に、母にみえなむ、あゆめわが駒。

**助動詞は、動詞に添ひて、その意義を助くる語なり。**

## 第五章。副詞。



副詞

例一。徐に讀め。

例二。力、頗る強し。

例三。稍しばし考ふ。

例の一なる「徐に」は、「讀め」といふ動詞に副ひ、例の二なる「頗る」は、「強し」といふ形容詞に副ひ、例の三なる「稍」は、「考ふ」といふ動詞に副ひたる「しばし」といふ副詞に、重ねて副ひて、いづれも、それ〳〵、副ひたる語の意義を修飾す。これらを**副詞**といふ。

次の諸文の中の副詞を、その修飾せる語と共に示すべし。

一。西郷隆盛、遂に兵を九州に擧ぐ。

二。喇叭の聲、いと勇し。

三。われも、かならずゆかむ。

四。おもしろき夢の忽ち覺めしは、甚名殘惜しかりき

五。わが伯父なる人は、かつて札幌に住みき。
六。友、また來しかど、われ、また居らざりき。
七。入學願出の日限、いまだ切れざるに、願人は、はや定員に滿ちたり。
八。かの地に御逗留の中の御話、ちと承りたく候。
九。なほ、御引立下されむ事を、ひたすら願ひ候。
十。吹くからに、秋の草木の、しをるれば、うべ山風を、嵐といふらむ。

副詞は、動詞、形容詞、或は他の副詞に副ひて、その意義を修飾する語なり。

## 第六章。接續詞。

例一。旅人は、山、又、川を過ぐ。
例二。雨降り、且、風吹く。

例の一なる「又」は、「山」と「川」との二語をつゞけ、例の二なる「且」は、「雨降り」と「風吹く」との二文を續く。かゝる語を接續詞といふ。

次の諸文の中に就きて、接續詞を求めよ。

一。天然の巧妙、實に感ずべく、又、驚くべし。
二。入場料は、一人、金五錢なり、但し、學校の生徒には、その半額とす。
三。余、その妙なるに驚き、且、その便なるに服せり。
四。君は、反對せむとするか、抑、贊成せむとするか。
五。進まむも甚難く、さて、退かむもくちをしからずや。
六。今度の幹事は、君なるか、はた、山本君なるか。
七。雪積れり、すなはち、われら、雪打して遊びぬ。

接續詞は、文、又は、語句の間にありて、雙方を續ぎ合はする語なり。

## 第七章。豆爾乎波。

例一。君は、春と秋と、いづれをよしと思ふか。

互爾乎波

例二。　汽車に乘りて、横濱まで行けば、そこより、亞米利加へ行く汽船あり。

右の二例の中の「は」、「と」、「を」、「か」、「に」、「まで」、「ば」、「より」、「へ」などは、いづれも、他の語の間にありて、相互の關係を定むる語なり。これらを互爾乎波といふ。互爾乎波は、すべて、獨立にては用あられず。

次の諸文の中より、互爾乎波を探り出せ。

一。　蝶は、花より花に飛び移る。
二。　われの行きし時は、おそかりしにや、歸るものばかりなりき。
三。　荻生徂徠は、苦學せし末に、名高き大學者とぞなりしといふ。
四。　精神一たび到らば、何事か成らざらむ。
五。　扇などをも、人多き中に、取りも落し、忘れもする事あり、これらの物にても、そのぬしの心はおしはからるゝ事なり。
六。　こゝは、街道より東へ五里隔りたる片ゐなかなるに、教育行きとゞきて、おのが名すら得書かぬやうの者は、一人だになし。
七。　玉の宮居は、あれはてゝ、雨さへ露さへ、いとしげゝれど、民の竈の賑は、立つ烟にぞ、知られける。
八。　金剛石も、みがかずば、玉の光や、そはざらむ、人も學びて、後にこそ、まことの德は、あらはるれ。



感動詞

互爾乎波は、言語の中間にありて、相互の關係を定むる語なり。

## 第八章。　感動詞。

例一。　嗚呼、忠臣楠子之墓。
例二。　あな、面白の今宵の月や。

右の二例の「嗚呼」、「あな」、「や」は、共に、人情の感動したるより發する語なり。これらを感動詞といふ。

次の諸文の中にて、感動詞を求めよ。

一、すは、敵こそ攻めきたれ。
二、あはれ、樂しきかな、春の野遊。
三、オー、わが宿よ、たのしともたのしや。
四、あら羨し、かの人は、優等賞を得たりしぞや。
五、やあ正綱、頼將が十四歳に遇ふこと、再びやあるべき。
六、環のごとくに、まどかにめぐれよ、やよ兒ども。

感動詞は、感動に發する聲をあらはす語なり。

## 第九章。品詞。

單語

品詞

以上、學びたる名詞、動詞などの、一つ〳〵をさして、單語といふ。その種類、八つあり。名詞、動詞、形容詞、助動詞、副詞、接續詞、豆爾乎波、感動詞、これなり。これを八品詞といふ。品詞は、その形を變ぜずして、轉じて、他の品詞となることあり。例へば、

三時間餘りかゝりて、午後五時だいかひを終へたり。

## 第一表　動詞の活用。

四段活用

| 不定法 | 第一轉 | 第二轉 | 第三轉 | 第四轉 | 第五轉 | 第六轉 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 中止法（本體） | さ(咲)ーか | さーき | さーく | さーく | さーけ | さーけ |
| 連用法 | お(押)ーさ | おーし | おーす | おーす | おーせ | おーせ |
| 名詞法 | か(勝)ーた | かーち | かーつ | かーつ | かーて | かーて |
| 第一終止法 | い(云)ーは | いーひ | いーふ | いーふ | いーへ | いーへ |
| 第二終止法 | よ(讀)ーま | よーみ | よーむ | よーむ | よーめ | よーめ |
| 第三終止法 | ふ(降)ーら | ふーり | ふーる | ふーる | ふーれ | ふーれ |
| 連體法 | い(生)ーき | いーき | いーく | いーく | いーくれ | いーきよ |
| 連用法 | お(落)ーち | おーち | おーつ | おーつる | おーつれ | おーちよ |
| 命令法 | し(强)ーひ | しーひ | しーふ | しーふる | しーふれ | しーひよ |

# 第一表　動詞の活用。

| | | 第一轉 | 第二轉 | 第三轉 | 第四轉 | 第五轉 | 第六轉 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 不定法 | | 中止法 連用法 名詞法 | 第一終止法 | 第二終止法 | 第三終止法 | 命令法 |
| | | （本體） | | | | | |
| 正格活用　四段活用 | | さ(咲)ーか | さーき | さーく | さーく | さーけ | さーけ |
| | | お(押)ーさ | おーし | おーす | おーす | おーせ | おーせ |
| | | か(勝)ーた | かーち | かーつ | かーつ | かーて | かーて |
| | | い(云)ーは | いーひ | いーふ | いーふ | いーへ | いーへ |
| | | よ(讀)ーま | よーみ | よーむ | よーむ | よーめ | よーめ |
| | | ふ(降)ーら | ふーり | ふーる | ふーる | ふーれ | ふーれ |
| 上二段活用 | | い(生)ーき | いーき | いーく | いーくる | いーくれ | いーきよ |
| | | お(落)ーち | おーち | おーつ | おーつる | おーつれ | おーちよ |
| | | し(强)ーひ | しーひ | しーふ | しーふる | しーふれ | しーひよ |
| | | うら(恨)ーみ | うらーみ | うらーむ | うらーむる | うらーむれ | うらーみよ |
| | | むく(報)ーい | むくーい | むくーゆ | むくーゆる | むくーゆれ | むくーいよ |
| | | こ(懲)ーり | こーり | こーる | こーるる | こーるれ | こーりよ |
| 下二段活用 | | え(得) | え | う | うる | うれ | えよ |
| | | う(受)ーけ | うーけ | うーく | うーくる | うーくれ | うーけよ |
| | | まか(任)ーせ | まかーせ | まかーす | まかーする | まかーすれ | まかーせよ |
| | | す(捨)ーて | すーて | すーつ | すーつる | すーつれ | すーてよ |
| | | か(兼)ーね | かーね | かーぬ | かーぬる | かーぬれ | かーねよ |
| | | へ(歷) | へ | ふ | ふる | ふれ | へよ |
| | | せ(攻)ーめ | せーめ | せーむ | せーむる | せーむれ | せーめよ |
| | | おぼ(覺)ーえ | おぼーえ | おぼーゆ | おぼーゆる | おぼーゆれ | おぼーえよ |
| | | おそ(怖)ーれ | おそーれ | おそーる | おそーるる | おそーるれ | おそーれよ |
| | | う(植)ーゑ | うーゑ | うーう | うーうる | うーうれ | うーゑよ |
| 上一段活用 | | い(射) | い | いる | いる | いれ | いよ |
| | | き(着) | き | きる | きる | きれ | きよ |
| | | に(似) | に | にる | にる | にれ | によ |
| | | ひ(乾) | ひ | ひる | ひる | ひれ | ひよ |
| | | み(見) | み | みる | みる | みれ | みよ |
| | | ゐ(居) | ゐ | ゐる | ゐる | ゐれ | ゐよ |
| 下一段活用 | | け(蹴) | け | ける | ける | けれ | けよ |
| 變格活用 | 加行變格活用 | こ(來) | き | く | くる | くれ | こよ |
| | 佐行變格活用 | せ(爲) | し | す | する | すれ | せよ |
| | | おは(御座)ーせ | おはーし | おはーす | おはーする | おはーすれ | おはーせよ |
| | 奈行變格活用 | い(往)ーな | いーに | いーぬ | いーぬる | いーぬれ | いーねよ |
| | | し(死)ーな | しーに | しーぬ | しーぬる | しーぬれ | しーねよ |
| | 良行變格活用 | あ(有)ーら | あーり | あーり | あーる | あーれ | あーれよ |
| | | を(居)ーら | をーり | をーり | をーる | をーれ | をーれよ |
| | | はべ(侍)ーら | はべーり | はべーり | はべーる | はべーれ | はべーれよ |

變格活用

| 佐行變格活用 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| おは(御座)ーせ | おはーし | おはーす | おはーする | おはーすれ | おはーせよ |

| 奈行變格活用 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| い(往)ーな | いーに | いーぬ | いーぬる | いーぬれ | いーね |
| し(死)ーな | しーに | しーぬ | しーぬる | しーぬれ | しーね |

| 良行變格活用 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| あ(有)ーら | あーり | あーり | あーる | あーれ | あーれ |
| を(居)ーら | をーり | をーり | をーる | をーれ | をーれ |
| はべ(侍)ーら | はべーり | はべーり | はべーる | はべーれ | はべーれ |

三時間餘もたゝかひき。

午後五時、たゝかひを終へたり。

(イ)なる「たゝかひ」は、物事の動作をいへるにて、動詞なれど、(イ)。

(ロ)なる「たゝかひ」は、物事の名をいへるにて、名詞なり。また、(ロ)。

父母の恩は、山よりも高く、海よりも深し。

敵は、城の上に、白旗を高くかゝげたり。

(ハ)なる「高く」は、「恩」を形容したれば、形容詞なれど、(ハ)。

(ニ)なる「高く」は、「かゝげ」といふ動詞に副ひたれば、副詞なり。(ニ)。

今日は、日曜日なり。

友は、今日訪ひ來む。

(ホ)なる「今日」は、名詞なれど、(ホ)。

(ヘ)にては、副詞として用ゐられたり。(ヘ)。

右にいへるが如きこと、國語に少からず、よく考へ別けて、誤

らぬやうにすべし。

次の諸文の中の各品詞を解きて、一々その名を示すべし。

一。世の海を穩に渡る術は、勤と、儉と、讓と、の三つのみ。

二。今日君の訪ふあり、そのつゞきを語らむ。

三。櫻は、わが國の名花として、古より世に知られたり。

四。奥の間の時計は、今十時を告げぬ。

五。敵、いまや來ると待ちたれど、つひに、その影だにも見えざりけり。

六。人は、交る友によりて、よきにあしきになるものなり。

七。茶及び陶器を、この地の名產とす。

八。つはものの交、たのみある中の酒宴かな。

九。外國の皇帝より贈られたる勳章の數は、すでに十にも及びぬ。

十。電、忽ち閃くよと見えしに、瞬く間に、雷、凄しく轟きけり。

十一。夜、いたくふけて、ランプの油盡きむとしたれば、われは、書を掩ひて、眠に就きぬ。



十二。紡績場の夕の笛、遠くきこえて、樂しき今日も、つひに暮れぬ。

十三。主人は、やさしき人なれば、使はるゝ者は、皆その用をすることを樂みたり。

十四。よろづの樂のうちにて、自然を愛づる樂は、つくることもなく、あくこともなき、最も清き樂なり。

十五。昨日、博物館を見にゆきしかへりに、彼の家を訪ひしが、をりあしく、居らずして、空しくかへりき。

十六。隣の家に、花を賣りてくらしを立つる翁あり、年七十に近けれど、力、なほ強きこと、わかき人のごとし。

十七。この頃は、わが蒔きたる朝顏の、いつ咲くかと、樂しく待たれてのみ、日を暮しつ。

十八。身を立て、道を行ひ、名を後の世に揚げて、父母を顯すことは、孝の終なりと、聖人は說かせられたり。

## 第十章。熟語。疊語。接頭語。接尾語。

## 熟語

例。人々、こゝろよき春風に吹かれて、花園を散歩す。

この文の中なる「こゝろ」(名詞)は、「よき」(形容詞)と合ひて、一語の形容詞となり、「春」(名詞)は、「風」(名詞)と合ひて、一語の名詞となり、「花」(名詞)は、「園」(名詞)と合ひて、また一語の名詞となり、「散歩」(名詞)は、「す」(動詞)と合ひて、一語の動詞となりて、みな、新しき意義を成せり。かく、數語の、相合ひて一語となるを熟語といふ。

熟語は、甚多し、次にその數例をあげむ。

わが(動)はじめて(助)東京(名)見物(名)に來しは、十五(數)歲(名)の春なりき。

伊藤(名)樞密院(名)議長(名)、帝國(名)憲法(名)をさゝげ(動)まつる(動)。



## 疊語

國國(名詞)の(名詞)委員(名詞)委員(名詞)は、おもひおもひ(名詞)の(名詞)取調(名詞)に(名詞)着手す(動詞)。

この終の例なる「國國」、「委員委員」、「おもひおもひ」は、同語を重ね用ゐたる熟語にて、かゝるを疊語といふ。疊語の用法意義も、亦樣々なり。次の例を見よ。

御店(熟語の名詞)、日日(疊語の副詞)ます(疊語の副詞)、ます(動)、榮え(動)行き(動)候(動)事(熟語の動詞)、めてたく(熟語の副詞)存じ(動)上げ(動)候(動)。

この例の中なる「御店」は、「店」(名詞)の頭に、「御」といふ語の接して、

接頭語

接尾語

一つの熟語となれるなり。かく、他語の頭に接して熟語となりて、その意義を添ふるものを、**接頭語**といふ。また「めでたく」は、「めで」(動詞)の尾に「たく」といふ語の接して、一つの熟語の形容詞となり、これより轉じて、こゝには、副詞として用ゐられたるなり。かく、他語の尾に接して、熟語となるものを、**接尾語**といふ。

接頭語と接尾語とは、八品詞の外にして、いづれも、獨立には用ゐられず、且、慣用の法によるべきものなり。

次の諸文の中の各品詞を解きて、一々その名を示せ。また、熟語、疊語、接頭語、接尾語をも區別すべし。

厚き(形)　御(名(熟))　情(名)　の(互)　程(名)、　誠に(副(熟))　あり(動)　がたく(動)　存じ(動(熟))　候。(動)

君(代)　は(互)、　士官(名(熟))　候補生(名)　たら(助)　む(助)　と(互)　する(動)　か(互)、　或(接(熟))　は(互)、　海軍(名(熟))　兵學校(名)　に(互)　入ら(動)　む(助)　と(互)　する(動)　か(互)。

行く(動)　く(同上)、　友(名(熟))　だち(名)　と(互)、　面白き(形(熟))　話(名)　など(名)　し(動)　て(助)、

われ(代(熟))　ら(尾)　は(互)、　知ら(動)　ず(助)　く(同上)、　渡場(名(熟))　を(互)　通り(動(熟))　過ぎ(動)　たり(助)。

五月(名)　十六日(名)、　早く(副)　起き(動)　て(助)、　停車場(名)　に(互)　會し(動(熟))

われら三たり、第一番の列車に乘り
代(熟)　代　尾　數　尾　頭　數　尾　名(熟)　名　豆　名　豆　動

て、幾年月、夢にのみ見し都へと、まだ
助　副(熟)　頭　名　名　名　豆　豆　動　助　名　豆　豆　副

なれぬ初旅に、いでたちぬ。
動　助　名(熟)　頭　名　豆　動(熟)　動　動　助

一、君が代は、千代に八千代に、さゞれ石の巖となりて、苔のむすまで。

二、わかき時、學ばぬ悔を、かみしむる、奥齒なきまで、身は老いにけり。

三、金は、打展べて金箔とし、又は、引延べて針がねとすることを得。

四、一小蟲にして、大切に人に養はるゝものは、唯、蠶なるべし。

五、身體の中央、即ち腹部には、厨にも比ぶべき胃といふものあり。

六、わが第一遊擊隊は、敵艦の來遠を追擊しつゝ、つひにそをうち沈め、午後五時に、戰を終へたり。

七、初秋の事なれば、品川大森の海面に、薄霧たち渡りて、安房上總の山々も見えず。

八、明治の年數に、幾年を加ふるときは、わが紀元年數を得るか、又、幾年を加ふれば、西曆年數を得るか。

九、信長の近臣に、森蘭丸といふものありて、信長、甚これを寵愛せり。

十、宇多天皇、藤原氏の專權を惡み、私かにこれを抑制し給はむ御志おはせしかば、ことに、道眞を拔擢して、藤原氏の權を殺がむとし給ひき。

十一、漁火は、月に光を奪はれて、遠く有渡の海に漂ひ、汽船は、沖に烟を殘して、近く清水港へ向ふ。

十二、墨田川の水、遠く流れて、八島の外に、御うつくしみの波を湛へ、武藏野の草、ひろく茂りて、四方の國に、御めぐみの露をむすびつ。

十三、海水、船底よりこみ入りて、防ぎ止めむやうなく、船は、見る〳〵、千尋の底に沈みしかど、船人等は、端艇に乘り移りて、辛うじて死を

免れぬ。

十四。誠だにあらば、主には見かぎらるまじきなり、いかに上手にしたりとも、僞は終にかくるまじきなり。

十五。いかに人々よ、實業の盛衰は、一國興亡の分る、門戸なることを知るや、はた、實業の敎育は、海陸練兵と齊しく、獨立を維持する爲の關城なることを知るや。

十六。その後は、つい〳〵御無沙汰致し居り候事、御ゆるし下されたく候、さて、かねて御話申し置き候ひし同窓會の義は、今般、いよ〳〵組織することにきまり候につき、明晩、私方にて、その發起人會を開くべく候へば、御出席下されたく候。

十七。花さく春の、曙を、はや疾くおきて、見よかしと、鳴く鶯も、心して、人の夢をぞ、さましける。

十八。かをりにしらるゝ、花咲く御園、霞にかくるゝ、鳥なくはやし、君が代いはひて、幾春までも、かをれやかをれやうたへやうたへ。

十九。初日の光、明けく、治る御代の、けさの空、君が御影に、たぐへつゝ、仰ぎ見るこそ、たふとけれ。

二十。人の親の、心はやみに、あらねども、子を思ふ路に、まどひぬるかな。

# 第十一章。動詞の用方。

## 第一節。動詞の性。

例一。花散りて、人歸る。

例二。生徒は、書を讀み、字を習ふ。

例の一なる「散り」と「歸る」とは、各、「花」と「人」との動作をあらはす動詞にて、このまゝにて、その意、よく通ず。例の二なる「讀み」、「習ふ」も、共に、「生徒」の動作をあらはす動詞なれども、その意、このまゝにては通ぜず、他に、「書」又は「字」の如き語を要す。すべて、動詞には、その性質によりて、かく、「散り」、「歸る」の如く、

その動作の、自らするものと、また、「讀み」、「習ふ」の如く、その動作の、他の「書」、「字」の如きを處分するものとあり。

動詞の動作の性質の、獨自らするものを、**自動詞**といふ、かの「散る」、「歸る」の如きもの、これなり。その動作の性質の他に及ぶものを、**他動詞**といふ、「讀む」、「習ふ」の如きもの、これなり。

而して、動作を及ぼさるゝものを、動詞の動作の**目的**といふ、「書」、「字」、これなり。さて、目的をあらはすには、「豆爾乎波」の「を」を要す。

用ゐ方によりて、同じき動詞の、自動詞とも、他動詞とも、なるものあり。例へば、

門を開く。（他動）。　花開く。（自動）。

身を立つ。（他動）。　大木立つ。（自動）。

枝を折る。（他動）。　竹、雪に折る。（自動）。



次の諸文の中より動詞を求めて、その自動詞なるか、他動詞なるかを分つべし。

一、山林をいたはりそだつるは、農作に劣らぬ事業なり。

二、日本臣民は、法律の定むる所に從ひて、兵役納税の義務を有す。

三、あはれ、維新の功臣、遂に城山松の下露と消えぬ。

四、葉志超は、牙山の戰に敗れて、婦人の衣を着て逃げ去りたり。

五、わが大砲は、超勇をうち沈めたりしに、溺れながら助を乞ひて叫ぶ聲、大砲のひゞきと相和せり。

六、三保の松原、海原と緑を競ひて、夕波に浮び、伊豆の天城、青雲と高さを比べて、落日に映ず。

七、惡を爲して福を願ふは、火に就きて冷を求め、水に入りて暖をもとむるに同じ。

八、われは、しばらくこの地を去らむとして、かつて、わが友より預りたりし行李を、更に伯母なる人に預けたり。

九、月は、山の端に出でぬ。その日の獲物を入れたる籠を提げたる

釣人は、三たり四たり、つれだちてかへりゆく。

十。わが第五師團は、聯合軍の主力となりて、天津を出で、ゆく〳〵敵を敗りて、北京に進みぬ。

## 第二節。動詞の活用。

例。花咲かず。　花咲きぬ。　花咲く。　花咲けども、友來ず。

右の例にて、「咲く」といふ動詞は、「咲か」、「咲き」、「咲く」、「咲け」など、その語の末を、四樣に轉ず。かく、動詞が、その動作の意を種々に表さむとし、或は、他の語に連らむが爲に、その語の末を轉ずるを、**活用**ともいひ、**はたらく**ともいふ。而して、「さ(咲)く」の「さ」の如く動かぬ部を、**語根**といひ、「か」、「き」、「く」、「け」の如く轉ずる部を、**語尾**といふ。

活用はたらく
語根
語尾

動詞には、すべて活用あり、その活用する狀によりて、あらゆる動詞を、九類に類別す。

動詞の語尾の、五十音圖の、上より四段の音のうちにて、活用するものを、**四段活用**の動詞と名づけて、すべて六種あり。

四段活用

さ(咲)-か、　さ-き、　さ-く、　さ-け。　(加行)。
お(押)-さ、　お-し、　お-す、　お-せ。　(佐行)。
か(勝)-た、　か-ち、　か-つ、　か-て。　(多行)。
い(云)-は、　い-ひ、　い-ふ、　い-へ。　(波行)。
よ(讀)-ま、　よ-み、　よ-む、　よ-め。　(末行)。
ふ(降)-ら、　ふ-り、　ふ-る、　ふ-れ。　(良行)。

この同類なる動詞、最も多し。

動詞の語尾の、次に記す如く、五十音圖の、伊の段の音と宇の段の音とに活用し、これに、また、「る」、「れ」、「よ」の添ふものを、**上二段活用**の動詞といひて、亦六種あり。

上二段活用

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| い(生)-き、 | い-く、 | い-くる、 | い-くれ、 | い-きよ。(加行)。 |
| お(落)-ち、 | お-つ、 | お-つる、 | お-つれ、 | お-ちよ。(多行)。 |
| し(强)-ひ、 | し-ふ、 | し-ふる、 | し-ふれ、 | し-ひよ。(波行)。 |
| うら(恨)み、 | うら-む、 | うら-むる、 | うら-むれ、 | うら-みよ。(末行)。 |
| むく(報)-い、 | むく-ゆ、 | むく-ゆる、 | むく-ゆれ、 | むく-いよ。(也行)。 |
| こ(懲)-り、 | こ-る、 | こ-るる、 | こ-るれ、 | こ-りよ。(良行)。 |

**下二段活用**

この類に屬する動詞は、甚多からず。

動詞の語尾の、宇の段と衣の段との音に活用して、これに「る、れ」、よ」の添ふものを、**下二段活用**といひて、次の如く十種あり。

この類に屬する動詞、頗る多し。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| え(得)、 | う、 | うる、 | うれ、 | えよ。(阿行)。 |
| う(受)-け、 | う-く、 | う-くる、 | う-くれ、 | う-けよ。(加行)。 |
| まか(任)-せ、 | まか-す、 | まか-する、 | まか-すれ、 | まか-せよ。(佐行)。 |



| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| す(捨)-て、 | す-つ、 | す-つる、 | す-つれ、 | す-てよ。(多行)。 |
| か(兼)-ね、 | か-ぬ、 | か-ぬる、 | か-ぬれ、 | か-ねよ。(奈行)。 |
| へ(歷)、 | ふ、 | ふる、 | ふれ、 | へよ。(波行)。 |
| せ(攻)-め、 | せ-む、 | せ-むる、 | せ-むれ、 | せ-めよ。(末行)。 |
| おぼ(覺)-え、 | おぼ-ゆ、 | おぼ-ゆる、 | おぼ-ゆれ、 | おぼ-えよ。(也行)。 |
| おそ(怖)-れ、 | おそ-る、 | おそ-るる、 | おそ-るれ、 | おそ-れよ。(良行)。 |
| う(植)-ゑ、 | う-う、 | う-うる、 | う-うれ、 | う-ゑよ。(和行)。 |

**上一段活用**

動詞の語尾の活用する狀の、伊の一段の音に「る」、れ」、よ」の添ふものを、**上一段活用**といひて、六種あり。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| い(射)、 | いる、 | いる、 | いれ、 | いよ。(阿行)。 |
| き(着)、 | きる、 | きる、 | きれ、 | きよ。(加行)。 |
| に(似)、 | にる、 | にる、 | にれ、 | によ。(奈行)。 |
| ひ(乾)、 | ひる、 | ひる、 | ひれ、 | ひよ。(波行)。 |

下一段活用

み(見)、　みる、　みれ、　みよ。(末行)。
ゐ(居)、　ゐる、　ゐれ、　ゐよ。(和行)。

この活用に屬する動詞は、僅に十數語なり。

**段活用**といひて、次の一語あるのみ。

け(蹴)、　ける、　けれ、　けよ。(加行)。

以上、四段活用、上二段活用、下二段活用、上一段活用、下一段活用の五類を**正格活用**といひ、これに對して、以下の四類を變

正格活用變格活用

**格活用**といふ。

加行變格活用

**加行變格活用**は、「來」の一語に限り、その活用の狀、次の如し。

こ(來)、　き、　く、　くる、　くれ、　こよ。

佐行變格活用

**佐行變格活用**は、「爲」、「御座す」、の二語のみにして、その活用の狀、次の如し。

せ(爲)、　し、　す、　する、　すれ、　せよ。
おは(御座)せ、おはし、おはす、おはする、おはすれ、おはせよ。

漢語、外國語、又は名詞は、この「す」と合ひて、熟語の動詞となる。

例へば、

議せ、　議し、　議す、　議する、　議すれ、　議せよ。
信ぜ、　信じ、　信ず、　信ずる、　信ずれ、　信ぜよ。
奔走せ、　奔走し、　奔走す、　奔走する、　奔走すれ、　奔走せよ。
欲せ、　欲し、　欲す、　欲する、　欲すれ、　欲せよ。
與せ、　與し、　與す、　與する、　與すれ、　與せよ。
往來せ、　往來し、　往來す、　往來する、　往來すれ、　往來せよ。

奈行變格活用

**奈行變格活用**といふは、また次の二語あるのみ。

い(往)な、　い-に、　い-ぬ、　い-ぬる、　い-ぬれ、　い-ね。
し(死)な、　し-に、　し-ぬ、　し-ぬる、　し-ぬれ、　し-ね。

良行變格活用

**良行變格活用**は、唯三語ありて、その活用の狀、次の如し。

あ(有)-ら、　あ-り、　あ-る、　あ-れ。
を(居)-ら、　を-り、　を-る、　を-れ。
はべ(侍)-ら、　はべ-り、　はべ-る、　はべ-れ。

「に」に終る副詞にて、この「あり」と連るとき、約りて、「なり」となるものあり。例へば、

明に(副詞)あり(動詞)、　明なり。
大切に(副詞)ある(動詞)品、　大切なる品。

國語の動詞の本體は、すべて、その語尾の、宇の段の音なるを、通則とす。ただ、良行變格のみ、伊の段の音なるが本體なるは、これ、實に、變格なり、且、良行四段活用と異なる所も此にあり。今、次に、動詞の各活用より、一語づゝ擧げて、その本體を示さむ。



さく(四段)、　おつ(上二段)、　まかす(下二段)、　(正格活用)。
にる(上一段)、　ける(下一段)。
く(加變)、　す(佐變)、　いぬ(奈變)、　あり(良變)。　(變格活用)。

また、あらゆる動詞は、すべて、五十音圖中の同じ行の音にのみ活用するを、通則とす。

以上、動詞の九類の活用のうちにて、變格の四類には、所屬の語、極めて少ければ、一々、これを諳んずべし。その他の正格五類の中にて、その活用の紛れ易きは、四段、上二段、下二段、の三類なり。今、一の動詞を見て、その何活用なるかを知らむとせば、まづ、「ず」といふ助動詞を添へて、その動詞の打消の意を作りてみるべし。かくて、「讀まず」、「書かず」の如く、阿の段よりつゞく時は、その動詞は、すべて四段活用にして、「起きず」、「朽ちず」の如く、伊の段よりつゞくは、すべて上二段活用、「忘れ

ず」、答「へず」の如く、衣の段よりつゞくは、すべて下二段活用なり、と知るべし。

次の諸文の中より、動詞を求めて、各、その何の活用に屬するかを答ふべし。

一。先生、客に接するにも、門生を敎ふるにも、諄々として、倦みしことあらず。

二。家光は、外敎を禁せむが爲に、國人の、海外に行く事を停めたり。

三。京都より東の方を仰がば、東山を隔てゝ、東北に聳ゆる山を見む。

四。今日は空晴れて、高嶺の雲も消えたれば、いざやとていで立つ。

五。思ひがけなく、穴くづれて、岩の落ち來ることあり。

六。喇叭高く響きて、始業を告げ渡れば、生徒は、組々に分れて整列し、敎師の來らるゝを待つ。

七。水無くば、動植物悉く死にはてゝ、目にふるゝ物はたゞ岩石土砂ばかりとなりぬべし。



八。昨夜の大雨にて、川筋に水溢れて、岸通は、通行止となりたれば、われらは、山手を經て歸ることを得たり。

九。保元以來さかえし平氏も、一たび敗れてまた起き得ず、たゞ、あはれを、琵琶法師の平語にとゞむるのみ。

十。宗高、馬を兩軍屬目の中に立てゝ、扇眼を海波數百歩の外に射むとす。

十一。後醍醐天皇は、隱岐の御座所に、元弘三年を迎へ給ひ、承久の昔を忍びておはせしに、告げ奉るものありて、千早籠城のことを知り給ふ。

十二。泉岳寺にて、義士の人々火にあたる時、主税は、その身につけし、母の形見の衣の濡れたるを、取り出して乾し居たるを、父の良雄も、見て涙落しゝ由なり。

## 第三節。動詞の法。

例一。花咲く。

法

例二。　花咲く春は來つ。

例三。　花咲きにほふ。

例の一なる「咲く」は、單に、「花」の動作をいひて、その文終りたるものなり。例の二なる「咲く」は、その下、「春」といふ名詞に連りて、その有樣を形容せるものなり。例の三なる「咲き」は、その下、他の動詞の「にほふ」に連りて、熟語となれるものなり。かく、動詞は、語尾を活用して、そのいひぶりに、種々の形を生ず、これを、動詞の法といふ。

例。花咲く。　人起く。　孝子、賞を受く。

人々、衣を着る。　馬、人を蹴る。　友來。

生徒、下讀をす。　年月往ぬ。　山に樹あり。

右の例なる「咲く」、「起く」、「受く」、「着る」、「蹴る」、「來」、「す」、「往ぬ」、「あり」は、





終止法

第一終止法

第二終止法

第三終止法

いづれも、單に動作を言ひて、その文の終とする法にして、これを終止法といふ。すべて、尋常の文を結ぶには、皆かくの如くす、これを第一終止法とす。

されども、動詞の上に、且爾乎波の「ぞ」、「なむ」、「や」、「か」、の加れる時には、その語尾を轉じて、次の如く結ぶ、これを第二終止法とす。

花ぞ(なむ、や、か)咲く。　人ぞ(なむ、や、か)起くる。　孝子ぞ(なむ、や、か)賞を受くる。　人々、衣をぞ(なむ、や、か)着る。　馬、人をぞ(なむ、や、か)蹴る。　友ぞ(なむ、や、か)來る。　生徒、下讀をぞ(なむ、や、か)する。　年月ぞ(なむ、や、か)往ぬる。　山に樹ぞ(なむ、や、か)ある。

又、もし、且爾乎波の「こそ」の加れる時は、その語尾を轉じて、次の如く結ぶを通則とす、これを第三終止法とす。

花こそ咲け。人こそ起くれ。孝子こそ、賞をうくれ。
人々、衣をこそ着れ。馬こそ、人を蹴れ。友こそ來れ。
生徒、下讀をこそすれ。年月こそ往ぬれ。山に、樹こそ
あれ。

今の口語にては、第二、第三の終止法すたれて、上二段、下二段、
加行變格、佐行變格、良行變格の五活用にては、第一終止法を
次の如く用ゐる。

人起きる。孝子、賞を受ける。友來る。生徒、下讀をする。
山に樹ある。

例。咲く花。　起くる事。　賞を受くる孝子。
衣を着る時。　人を蹴る馬。　來る友。　下
讀をする生徒。　往ぬる年月。　樹ある山。



## 連體法

右の例なる「咲く」、起くる」、受くる」、着る」、蹴る」、來る」、する」、往
ぬる」、ある」は、いづれも、その下、名詞の「花」、事」、孝子」、時」、馬」、友」、
生徒」、年月」、山」に連りて、各、その有樣を形容す、これを連體法
といふ。

此の法の下にあるべき名詞を、時としては、あらはさぬこと
あり。例へば、

生くる(事)と、死ぬる(事)と、いづれか難き、
去る(者)をば追はず、來る(者)をば拒まず、

の如し。

上二段、下二段の二活用の連體法を、口語にては、次の如く轉
じ用ゐる。

起きる事。賞を受ける孝子。

例。花咲かず。　われは起きむ。　賞を受けしむ。
衣を着ば。　馬に蹴らる。　友來じ。　下讀をせさす。　客に往なる。　奏樂あらむ。

右の例なる「咲か」、「起き」、「受け」、「着」、「蹴」、「來」、「せ」、「往な」、「あら」は、いづれも、「ず」、「む」、「しむ」、「ば」、「らる」、「じ」、「さす」、「る」、などの助動詞、豆爾乎波等に連續せむが爲の法にて、その用定らざるが故に、これを不定法といふ。

不定法

例。花咲き、鳥歌ふ。　夙に起き、夜に寐ぬ。　譽を受け、名を揚ぐ。　衣を着、帶をしむ。　鞠を蹴、歌をよむ。　友來、われ往く。　下讀をし、復習をす。　客往に、日暮る。　奏樂あり、花火あり。

右の例なる「咲き」、「起き」、（若しくは「受け」、「着」、「蹴」、「來」、「し」、「往に」、「あり」）は、「花咲く」、又、「鳥歌ふ」、「夙に起く」、又、「夜に寐ぬ」、などいふが如く、各自に終止とすべきを、しばし、「咲き」、「起き」、などいひさして、末なる「歌ふ」、「寐ぬ」、（若しくは「揚ぐ」、「しむ」、「よむ」、「往く」、「す」、「暮る」、「あり」）といふ動詞に應じ、その法（終止）に從ふものなり。　これを中止法といふ。

中止法

例。花咲きにほふ。　われは起きいづ。　金を受け取る。　美しく着飾る。　敵を蹴仆す。　友來あはす。　下讀をし始む。　客往に去る。
これあり候。

右の例なる「咲き」、「起き」、「受け」、「着」、「蹴」、「來」、「し」、「往に」、「あり」は、いづれも、その下の動詞の「にほふ」、「いづ」、「取る」、「飾る」、「仆す」、「あはす」、「始む」、「去る」、「候」などに連りて、これと共に、熟語となる法なり。　こ

連用法

れを**連用法**といふ。この法、又、稀に形容詞と連ることあり、「花咲き難し」、小敵侮りにくし」の如し。

例。勝ちを得。　恨みを忘る。　教へを受く。

右の例なる「勝ち」、「恨み」、「教へ」は、いづれも、動詞の、轉じて名詞となれるものなり。これを**名詞法**といふ。

名詞法

例。花咲け。　早く起きよ。　賞を受けよ。

羽織を着よ。　鞠を蹴よ。　友、來よ。

下讀をせよ。　疾く往れ。　吾によき友あれ。

右の例なる「咲け」、「起きよ」、「受けよ」、「着よ」、「蹴よ」、「來よ」、「せよ」、「往ね」、「あれ」、は、いづれも、他に動作を命じ、又は、希ひ求むる意をいふ法にて、これを**命令法**といふ。

命令法

あらゆる動詞に、すべて、右の七法あり、これを動詞の語尾の各轉に當つれば、次の如し。

第一轉、　不定法。
第二轉、　中止法、連用法、名詞法。
第三轉、　第一終止法。
第四轉、　第二終止法、連體法。
第五轉、　第三終止法。
第六轉、　命令法。

第一表と參見すべし。又、第一表にて、九類の動詞の、語尾を轉ずる樣を、各、其調によりて、よく覺えおくべし。例へば、四段活用の六轉の調を「か、き、く、く、け、け」と覺えおき、これを應用して、波行四段の語尾を「は、ひ、ふ、ふ、へ、へ」と知り、下二段活用の六轉の調を「え、え、う、うる、うれ、えよ」と覺えおきて、末行下二段

の語尾を、「め、め、む、むる、むれ、めよ」と知るなり。かく、覺え得たる六轉を、七法にあてゝ、何法には、語尾をいかにすべきか、といふことを、十分に諳んじおくこと、肝要なり。

次の諸文の中より、動詞を求めて、その、何活用のものにて、何法に用ゐられたるかを示せ。且、その名詞となれるものをも指せ。

例。酒に醉ひ戯るゝ、習あるは、美風にあらず。

醉ひ、　波行四段、第二轉、(連用法)。
戯るゝ、　良行下二段、第四轉、(連體法)。
習、　波行四段、第二轉、(名詞法)。
ある(事)、　良行變格、第四轉、(連體法)。
あら、　良行變格、第一轉、(不定法)。



一。一匁の金を引き延ばし、凡そ二里五町の金線となすことを得。
二。天は、富貴を人に與へずして、その人のはたらきに與ふるものなり。
三。年少き時の事を思ひ出づる毎に、流るゝ汗、背をうるほすこゝちす。
四。赤十字社は、戰場に趣き、敵身方の別なく、病兵負傷兵をいたはり救ふを目的とす。
五。にげゆく敵は、われより大砲小銃うちかけられて、斃るゝもの、野山にみつ。
六。汽車は、大和の奈良を發し、郡山を經、有名なる大寺法隆寺の近傍を過ぎ、西北に信貴山を望み、王寺に至り、大和川に沿ひ、河内國に入り、遂に攝津の大阪市湊町驛に着く。
七。至極恰好の品見當り候間、買求めおき候。
八。百鳥千鳥、來よ來よと、昏るゝも知らず囀る。
九。矢玉降るなかも、怖れず進め、太刀うつしたも、ひるまずすゝめ。

十。　弓矢取る身の門出のならひ、千に一つ、この世の御別とならば、後にこそ悔いたまはめ。

## 第四節。　動詞の誤。

例。教ゆる人は、親切なれど、習ふ者は、おぼへわろし。

「教ふ」は、波行下二段活用にて、その語尾「へ、へ、ふ、ふる、ふれ、へよ」と轉じ、「覺ゆ」は、也行下二段にて、その語尾「え、え、ゆ、ゆる、ゆれ、えよ」と轉ず。　されば、この例の中の、「教ゆる」、「おぼへ」は、いづれも誤なり、「教ふる」、「おぼえ」と改むべし。

例。猿も、木から落ちる。　松をぞ植う。　獨こそ行く。

右の例の初なるは、尋常の文なるが故に、第一終止法にて結ぶべく、中なるは、「ぞ」といふ豆爾乎波あれば、第二終止法にて結ぶべく、終なるは、「こそ」といふ豆爾乎波あれば、第三終止法にて結ぶべきなり。　されば、改めて、「落ちる」を「落つ」、「植う」を「植うる」、「行く」を「行け」とすべきなり。

例。流る水。　懲りる程の罰。

「流る」は、良行下二段にて、その連體法は「流るゝ」なり、「懲る」は、良行上二段にて、その連體法は「懲るゝ」なり。　されば、右の例、二つとも誤れり、「流るゝ水」、「懲るゝ程の罰」と正すべし。

例。わが友の家は、河を隔てあり。

この例なる「隔て」は、多行下二段活用の連用法にて、良行變格の「あり」に續くべきが如くなれど、非なり。　良行變格の「あり」に限りて、上に連用法を承くることなし。　されば、改めて、「川を隔てゝあり」と、「て」を添ふべし。

例。疾く走れよ。　進みて死れよ。　恭儉なれ

よ。

四段、奈行變格、良行變格の活用の命令法には、語尾に「よ」を添ふるを要せず、「走れ」、「死ね」、「なれ」にて、事足れり。

次の諸動詞につきて、各その七法をつくれ。

例。習ふ。

字を習はず（不定法）、字を習ひ、書を讀む（中止法）、字を習ひ始む（連用法）、習性となる（名詞法）、字を習ふ（第一終止法）、字をぞ習ふ（第二終止法）、字をこそ習へ（第三終止法）、字を習ふ人（連體法）、よく字を習へ（命令法）。

一。讀む。　招く。　捨つ。　居り。
二。きこゆ。　あり。　思ふ。　落つ。
三。射る。　添ふ。　委ぬ。　過ぐ。
四。顯る。　怖る。　報ゆ。　出づ。

五。死ぬ。　來。　感ず。　まねす。

次の諸文の、誤あるは正すべく、口語なるは文章語に改め、漢文なるは國文に書き下せ、

一。敵軍、大に潰へ走る。
二。われらは、いかにして、父母の恩に報はむとするぞ。
三。賢人のきこへ高し。
四。麓に靜なる里がある。
五。學問をしてこそ、人たるかひあり。
六。この題には、君ならずして、誰か答ふ。
七。風ぞ吹け、月は清し。汝何をか怖る。
八。花に戲る蝶、枝にさへづる、鳥、いづれも春をぞよろこぶ。
九。怠る、者ども、この度の成績に懲れ。
十。人は、皆社會に盡すべき義務を有する、空しく死ぬは、鳥獸にも劣る。
十一。盛なる者は、かならず衰ふたとひにて、長者のやしき跡こそ、あな

たに見へる製造場となりたるなれ。

十二、米も、水にて煮ればこそ、飯となる、水無くては、人は、一日も生活す能はず。

十三、東より兵隊がくる、劍の光がかゞやきて見へる。

十四、許をえることなくして、この品に手を觸るゝを禁ずる。

十五、留守中の事は、詳にかれに敎へあり、よろづ任しおくべし。

十六、築山鑿池、畜鱗介、樹花木。

十七、攀山數里、乃得賊巢、屏息窺之。

十八、汝所以報我、莫大於此。

十九、木下順庵善敎人、一時英才、多出其門。

二十、子年老務劇、恐生疾病、子少自養之。



久志幾活用

志久志志幾活用

# 第十二章。形容詞の用方。

## 第一節。形容詞の活用。

例　かの人は善し。　かれは、善き人なり。　かの人こそ善けれ。　かれも善く、これも善し。

こゝの文にて、形容詞も、動詞の如く、語尾に活用あることを知り得べし。されど、その狀は、大に動詞に同じからず。今、これを分ちて、二類とす。

その一は、語尾を「く、し、き、けれ」と轉ずるものにて、これを**久志幾活用**といひて、只一種あり。

よ(善)-く、　よ-し、　よ-き、　よ-けれ。

しろ(白)-く、　しろ-し、　しろ-き、　しろ-けれ。

その二は、語尾を「しく、し、しき、しけれ」と轉ずるものにて、これを**志久志志幾活用**といひて、亦一種あるのみ。

あ(惡)-しく、　あ-し、　あ-しき、　あ-しけれ。

たの(樂)-しく、　たの-し、　たの-しき、　たの-しけれ。

次の諸文の中より形容詞を求めて、その何活用なるかを答へよ。

一、この暑き日に、重き車を引く牛馬こそ、實にいたましけれ。

二、人影見えず風寒し、蓬は枯れて霜白し。

三、我が國は島國なれば、地つゞきの隣國はなし、海を隔てゝ最も近きは、韓國なり。

四、金は、光澤甚美しく、鏽を生ずることなく、且產額甚少し。

五、金、銀、銅、鐵の用途の多き、石炭石油の效用の著しきは、言ふまでもなし。

六、すべて、心を用ゐてする仕事は、むづかしくして、手足を用ゐてする仕事は、易きものなり。そのむづかしき仕事をするは、身分重き人にて、易き仕事をするは、身分輕き者なり。

七、海原なせる、埴安の、池の面より、なほ廣き、惠の波に、あみし世を、仰ぐ今日こそ、たのしけれ。

法

終止法

第一終止法

第二終止法

## 第二節。形容詞の法。

形容詞の法は、次の四つなり。

終止法三種。　連體法。　中止法。　副詞法。

**終止法**は、文章の末を結ぶ法にて、これに三種あること、動詞の終止法の如し。例へば、

心善し、　時候惡し、　雪白し、　春樂し、

などの「善し」、「惡し」、「白し」、「樂し」は、**第一終止法**なり。これを形容詞の本體とす。又、上に「ぞ」、「なむ」、「や」、「か」のある時は、下を

心ぞ善き、　時候なむ惡しき、　雪や白き、　誰れか樂しき、

など結びて、これを**第二終止法**とし、もし、又上に「こそ」のある時は、

心こそ善けれ、　時候こそ惡しけれ、　雪こそ白けれ、

春こそ樂しけれ、

第三終止法

など結びて、これを**第三終止法**とすること、動詞の如し。

形容詞も、口語にては、第二、第三の終止法すたれて、第一終止法のみを、次の如く轉じ用ゐる。

心善い。　時候悪しい。　雪白い。　春樂しい。

連體法

**連體法**は、名詞の上に連る法にて、例へば、

善き心、　悪しき時候、　白き馬、　樂しき時、

と用ゐるが如し。此の法、動詞の連體法と同じく、その下にあるべき名詞を略することあり。例へば、

樂しき(事)につけ、悲しき(事)につけて、君をおもふ。

中止法

この法、口語にては、「き」を「い」に轉じ用ゐる。

樂しい時、　善い子、　久しい間。

**中止法**は、動詞の中止法に同じく、文章の中間にていひさして、末の語の法に應ずる法なり。例へば、

父母の恩は、山よりも高く、海よりも深し。

色黑く、力強き人。

右の例なる「高く」は、「高し」と結ぶべきを、しばしいひさして、末の「深し」に應じて、その法に從ひ、共に、終止の意を成し、「黑く」は、「黑き人」とやうに、連體法なるべきを中止して、末の「強き」に應じ、その法に從ひて、共に、連體の意を成すものなり。

副詞法

**副詞法**は、形容詞の、變じて副詞となる法なり。

善く舞ふ、　悪しく言ふ、　白く塗る、　樂しく待つ。

この法、音便にて、「く」を「う」と轉用することあり。

嬉しう思ふ、　嚴しう戒む、　待遇を厚うす。

又、この法の「烈しくあらむ」、「多くあり」、「久しくあるべし」、「無く

語根

あれ」など、良行變格の動詞の「あり」と連る時は、その「く」と「あ」と約りて、「か」となり、「烈しからむ、多かり」、「久しかるべし」、「無かれ」、などゝなるを常とす。

形容詞は、久志幾活用にては、その本體の「し」を去りたるを語根とし、志久志志幾活用にては、その本體を語根とす。而して、その語根に、接尾語の「さ」、「げ」、「み」を添ふれば、名詞となること、次の例の如し。

善さ、深さ、廣さ、樂しさ、苦しさ、懷しさ。寒げ、輕げ、嬉しげ、悲しげ。深み、重み、凄み。

形容詞の語根は、また、他語と合ひて熟語となる。

遠山、淺瀨、長生、嬉し涙、同じ事、細長し、近づく、

以上、形容詞の四法を、その語尾の各轉に配當すれば、次の如し。

第一轉、中止法、副詞法。
第二轉、第一終止法。
第三轉、第二終止法、連體法。
第四轉、第三終止法。

これによりて第二表を作る。

第二表。形容詞の活用。

| 語根 | 第一轉（中止法・副詞法） | 第二轉（第一終止法） | 第三轉（第二終止法・連體法） | 第四轉（第三終止法） |
|---|---|---|---|---|
| よ（善）<br>あし（惡） | よーく<br>あーしく | よーし<br>あーし | よーき<br>あーしき | よーけれ<br>あーしけれ |

久志幾活用
志久志志幾活用

次の諸文の中より、形容詞を求め、その何活用に屬し、何法

なるかを示せ。但し、副詞、或は、熟語となりたるものをも、あはせていふべし。

例。軍艦比叡は、體、ふるく、速力、おそきをもて、進退自由ならず、つねに、艦隊の列外にありて戰ひしに、東洋第一の甲鐵艦定遠にあひし時は、その危さ、たとへむかた無かりき。

ふるく、　久志幾活用、第一轉(中止法)。

おそき(事)、　久志幾活用、第三轉(連體法)。

危さ、　久志幾活用「危し」の語根に、接尾語「さ」の添ひて成れる名詞。

無かり、　久志幾活用、第一轉(副詞法)「無く」の、良行變格「あり」に連りて、約れるもの。

一。君子は、危きに近寄らず。

二。雲母は、剝がれ易き性を有するを以て、多く薄片となりて產す。

三。談話の末、なほゆかしかりしかど、日全く暮れたれば、暇を告げて立出でぬ。

四。忍耐の志を堅うせむとするには、他志の念を捨てずはあるべからず。

五。甲も乙も、固く執りて、一歩も讓らざれど、われより見れば、乙の方に、幾分のよわみあり。

六。承久の亂の後は、大權、長く關東に移りて、朝廷の昔の盛なりしさまは、見ることかたくなりぬ。

七。厚き御志の程、辱く受納致し候。

八。人と生れて、高きも賤しきも、せねばならぬは、學問なり。

九。長き橋を渡りたる時、風強く吹きたれば、厚き外套を纏ひたる人人も、耳赤うなりて、いと寒げに見えき。

十。御國は、あつさ、寒さ、程よくて、山のすがた、水のけはひさへ、たぐひなく美しきにあえて、人の情も、やさしくみやびやかなり。

## 第三節。　形容詞の誤。

例。花の散りゆくは惜しゝ。君に遇ふぞ樂し。
今日の榮を見るこそ、よろこばしき。

右の例の初なるは、尋常の文なれば、これを結ぶに、第一終止法を用ゐるべく、中なるは、「ぞ」の豆爾乎波、上にあれば、第二終止法を用ゐるべく、終なるは、「こそ」なる豆爾乎波、加はりてあれば、第三終止法を用ゐるべきなり。　さて、こゝの形容詞「惜し」は、その第二轉「惜し」を、第一終止法とし、「樂し」は、その第三轉「樂しき」を、第二終止法とし、「よろこばし」は、その第四轉「よろこばしけれ」を第三終止法とす。　されば、右の例は、いづれも誤れり。「花の散りゆくは惜し」、君に遇ふぞ樂しき」、今日の榮を見るこそ、よろこばしけれ」と正すべきなり。



例。稍久しふ待ちたる後、主人にあひぬ。

この例なる「久しふ」は、志久志志幾活用「久し」の、副詞法「久しく」の音便、「久しう」を誤りたるなり。　しか正すべし。

次の諸形容詞につきて、おの〳〵その四法を作れ。

例。早し。

年月、早く流る（副詞法）、流早し（第一終止法）、流や早き（第二終止法）、流こそ早けれ（第三終止法）、流早き川（連體法）、流早く、水清し（中止法）。

一。清し。　暗し。　憎し。　輕し。
二。耻し。　怪し。　烈し。　惡し。
三。弱し。　白し。　懷し。　輕輕し。

次の諸文の、誤れるは正し、口語なるは文章語に改めよ。

一。その時の有樣、聞くもおそろしゝ。
二。鶯も、まだ鳴かず、今年の春の、來るぞおそけれ。

三、この敎室の中の人々にて、誰か最も力强し。
四、かの君こそ、すぐれて逞しき。
五、弱くを扶け、强くを挫く。
六、毎々御たづね下され、厚き御情の程、ありがとう御禮申上げ候、御一同樣、何の御障ものう御暮しなされ候趣、うれしふ存じ候。
七、短い着物を着て、羽織の紐の白い長いのを、端の方にて結び、狹い絞の兵兒帶をしめる風が、書生のうちに行はる。　されど頗る見苦しい。

次の漢文を、國文に書き下すべし。

一、暹羅鷄、大抵高二尺餘、肩張脛大、距尖而長。
二、彼亦人子也、可善遇之。
三、桃、品類甚多、易於栽種、且早結實。

## 第十三章。　單文。

### 第一節。　主語。　說明語。





主語
說明語
文

例。　風吹く。　月淸し。

右の例なる「吹く」は、「風」の動作をいひ、「淸し」は、「月」の有樣をいふ。　さて、「風」、「月」は、この動作を起し、有樣を呈する、主たる語なれば、**主語**と稱し、これに對して、「吹く」、「淸し」は、その動作、また は有樣を說明する語なれば、**說明語**といふ。　主語と說明語とありて、はじめて完き思想を表すことを得。　而して、これを記したるものを**文**といふ。　されば、文は、かならず、主語と說明語とを具へずはあるべからず。

主語は、名詞(代名詞、數詞)にて成り、說明語は、動詞、形容詞、助動詞にて成る、共に、豆爾乎波の添ふことあり、熟語なることもあり。　而して、主語は上にあり、說明語は下にあるを、正則とす。

句

例。「われ」（主語）「起きいづ」（説明語）。「暑さこそ」（主語）「烈しけれ」（説明語）。

「學」（主語）「成り難し」（説明語）。「友だち」（主語）「來ず」（説明語）。「春雨ぞ」（主語）「降る」（説明語）。

されど、「吹く風」、清き月」、起きいづるわれ」、などいひては、その思想完結せざれば、文にあらず。かゝるものを**句**といふ。

次の諸文に就きて、各その主語と説明語とを示せ。

一。夕風、涼し。

二。少年は、老い易し。

三。今日こそ、樂しけれ。

四。深さ、測られず。

五。たれか、答へ得る。

六。第一遊擊艦隊、凱旋しき。

七。雪、降りいでぬ。



客語

八。父上、歸宅せられしか。

九。帝國議會は、召集せられたり。

十。火事や、鎭りたる。

十一。嶮しさ、譬へがたし。

十二。日本軍ぞ、先登したる。

十三。おもしろみ、盡きず。

十四。新校舍は、落成せむ。

十五。急行列車は、早からむ。

十六。汝等も、行くべからず。

## 第二節。客語。

例。われ、書を讀む。かれ、文を作る。

右の例にては、主語なる「われ」、かれ」と、説明語なる「讀む」作る」との外に、その動作の目的なる「書を」、文を」の語なければ、その意十分ならず、かゝる語を**客語**といふ。

目的の外に、説明語の種類によりて、別に、その動作の係るべき標準を要するものあり、これまた客語なり。例へば、

主語　われ、　客語　雨に　説明語　あふ。
（標準）

主語　伊東司令長官、　客語　書を　客語　丁提督に　説明語　寄せき。
（目的）　（標準）

客語は、名詞（代名詞、數詞）にて成りて、熟語なるものあり、豆爾乎波を要するものなれど、略することもあり。而して、客語は、主語と説明語との間に居るを正則とす。

次の諸文に就きて、各、その主語、説明語、客語を指し示せ。

一、犬は、夜を守る。
二、鷄、曉を報じぬ。
三、急行列車は、東京に着きたり。



四、傳令使、馬より飛び下る。
五、平氏は、源氏に滅されき。
六、余は、佛國留學を命ぜられたり。
七、某氏は、大學教授に任ぜられぬ。
八、雪は、雨にまじりぬ。
九、田舍者、人造金を黄金と見誤る。
十、われらは、動植物を生物と總稱す。
十一、列國聯合軍は、義和團匪と戰へり。
十二、趙高は、鹿を馬といひき。
十三、教師は、講義を次回に讓りつ。
十四、諸君は、教を君子に受けたり。
十五、われも、路を巡査に問ひき。
十六、父は、財産を長女に傳ふるならむ。
十七、接待掛は、會員章を來會者に渡したり。
十八、生徒らよ、六に八を加へよ。

十九。われらは善人を友とす。

二十。校長は優等生に賞詞を與へつ。

## 第三節。修飾語。

例。涼しき風、そよ〳〵と吹く。傾く月、愈清し。つれ〴〵なるわれは、紀行の書を車中に讀む。

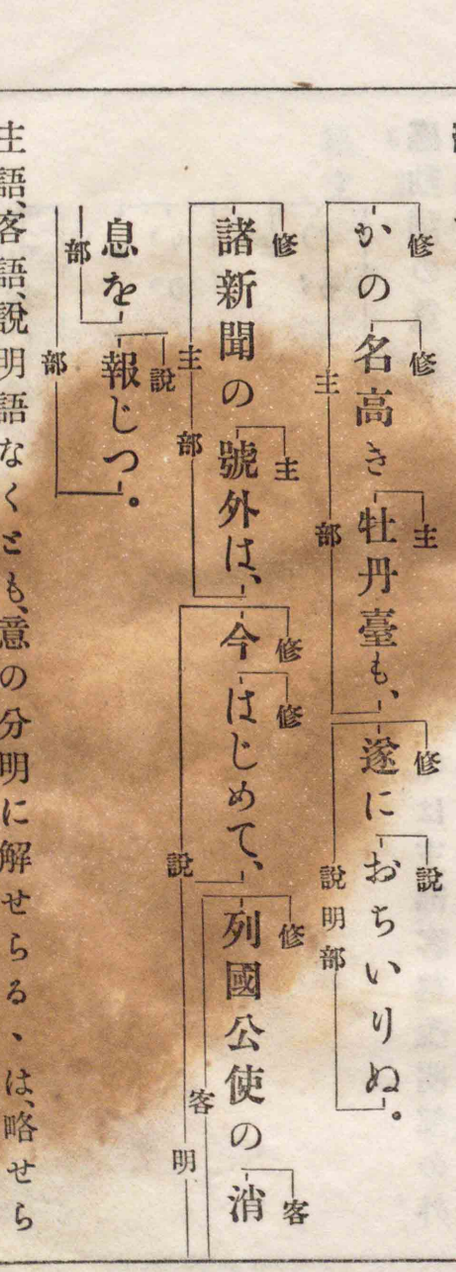
右の例なる「涼しき」、「傾く」、つれ〴〵なる」は、各「風」、「月」、「われは」といふ主語に添ひ、「そよ〳〵と」、「愈」、「車中に」は、各「吹く」、「清し」、「讀む」といふ說明語に添ひ、「紀行の」は「書を」といふ客語に添ひて、いづれも、その意義を修飾す。かゝる語を、**修飾語**といふ。

主語、客語の修飾語は、連體法の意を成し、說明語の修飾語は、副詞の意を成して、共に、その添ふべき語の上に居るを、正則とす。修飾語は、幾語をも重ぬることあり。

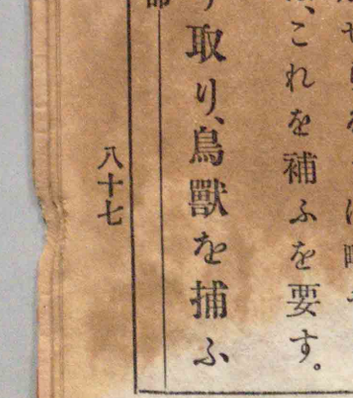


主部
說明部
客部

主語とその修飾語とを合せて、**主部**とし、說明語とその修飾語とを合せて、**說明部**とし、客語とその修飾語とを合せて、**客部**とす。




主語、客語、說明語なくとも、意の分明に解せらるゝは、略せらるゝことあり。されば、文を解かむには、これを補ふを要す。



る事を得ず。

北京にて敵に圍まるゝわが公使の安否は、

いかに（あらむか）。

わが文は、君の（文）に劣る。

感動詞の意の、全句、全文に係るものは、主部、客部、説明部の外に立つものとす。

やあ、汽車こそ出發したれ。

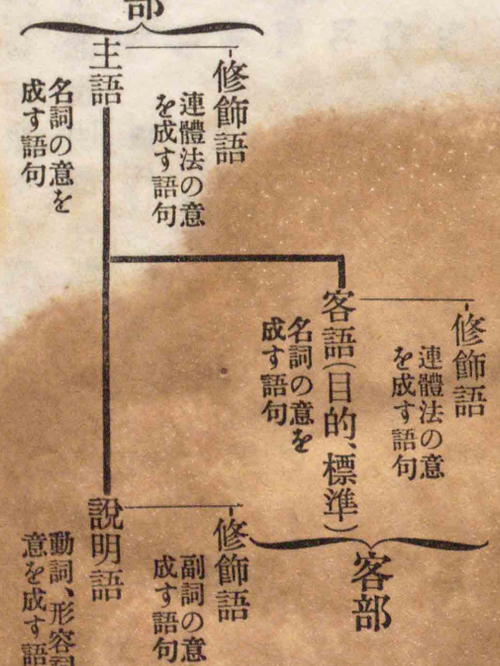




あな、面白の今宵の月（なり）や。

いかに長くとも、主語、説明語の、唯一つのみなる文を單文といふ。

單文の組織を、圖にて示さば、次の如くなるべし。



次の諸單文を解きて、各、その主語、説明語、客語、修飾語、及び主部、説明部、客部を分て。

一。禍は、口より起る。
二。君子は、その獨を愼む。
三。能ある鷹は、爪をかくす。
四。わが兒よ、この山の案内せよ。
五。栴檀は、二葉より芳し。
六。敵は、もとの地まで退きぬ。
七。わが軍は、午後四時ばかりに、またも攻めかゝりぬ。
八。この混成旅團こそ、最も苦難なる處に立ちたるなれ。
九。余、一日、散策のついでにその村にいたりぬ。
十。當寺の境内に、車馬を乘り入るべからず。
十一。九時半ごろより、人力車にて、東山邊を見あるく。
十二。足利氏の幕府は、鎌倉の制に倣ひたり。
十三。大覺寺、持明院、兩統の御爭は、武家に利用せられさせ給へり。



十四。富士川の水聲は、群鳥驚起の昔を語るに似たり。
十五。まことは、人の道ぞかし。
十六。本校に入學を望む者は、來む十日までに、入學願書をさしいだすべし。
十七。ます〳〵御機嫌よく、御暮しなされ候か。
十八。賑々しく御來車下され候樣、願ひ上げ候。
十九。昔も今も、かくさきにほふ、花にはそむく、人ぞなき。
二十。亡き父上が、わが三歳の誕生日に、記念として庭に植ゑたまひし松は、今尙青々と榮ゆ。

次の五題の定むるところに從ひて、各、單文を作れ。

一。一つの主語と、一つの説明語とにて。
二。一つの主語と、一つの説明語と、一つの客語とにて。
三。一つの主語と、一つの説明語と、二つの客語とにて。
四。一つの主語と、一つの説明語と、一つ以上の客語とに、いづれも、一つ以上の修飾語を添へて。

五、一つの主語と、一つの說明語と、一つ以上の客語とに、いづれも、一つ以上の修飾語と別に感動詞とを添へて。

## 第四節。倒置句。

例。つどめよ、兒ども。

この例なる「つどめよ」は、說明語にて、「兒ども」は主語なり。されば、この文は、主語と說明語と、その正當の位置を轉倒してあり。かゝるを倒置句といふ。

例。請ふ、贊成せられむ事を。

この文には、主語略せられてあり、これを補ひて解けば、

（われ等）、請ふ、贊成せられむ事を。

（主）（說）（修）（客）（客部）

されば、この文は、說明語と客部とを顚倒して用ゐたり。これも倒置句あり。



例。天津の城頭、はやくも、旭の御旗、ひるがへりぬ。

この文を解けば、左の如し。

天津の城頭（に）、はやくも、旭の御旗、ひるがへりぬ。

（修）（修）（修）（主）（說）（說）（明）（主部）（部）

修飾語は、その添ふべき語の上に居るを、正則とすること、前にいへり。されば、この例なる修飾語は、倒置句をなせり。

主語、客語、說明語、修飾語の、正當の位置を顚倒して用ゐられたるを、倒置句といふ。凡そ、語句を倒置するは、趣意の最も深きものを先づ言ひて、その意を強くせむが爲なり。

次の諸文の倒置句を求め、これを正當の位置にかへして試るべし。

一、萬代までと、君が代いはへ。

二、たぐひもあらじ、その功。

三、あはれ、樂しきかな、今日の遊や。
四、かゝる話を、君は、誰にか聞き得たる。
五、降る雪に、きこりの道も、うもれけり。
六、いはへ、國の爲、わが君を。
七、あにおとどもよ、まもりにまもれ、君が代を。
八、わが軍の勇ましき振舞、列國兵、皆感じ合へり。
九、この暑中休暇を、いかに君は暮さるゝか。
十、四方より集りし會員の中に、白髮の翁、三人ばかりうちまじりぬ。
十一、同じ病に惱まさるゝ世の人たちに、われは、この妙藥を與へたし。
十二、知るや、諸君よ、忠孝は國體の精華なることを。
十三、都には、君をのみこそ、おもひいづれ、紅葉のをりも、花の盛も。

正修 **日本文法教科書** 上卷 終


明治三十六年十一月二十五日印刷
明治三十六年十一月二十日發行
明治三十六年十一月二十日修正印刷
明治三十四年八月十日修正發行
明治三十四年十一月十三日修正印刷
明治三十四年十一月十日修正發行
明治三十四年十一月十日修正印刷
明治三十四年十一月十日修正發行
明治三十四年十一月十日印刷
明治三十四年十一月十日發行
明治三十四年十一月十日四版發行

著作者兼發行者　東京府北豐島郡日暮里村二百五十八番地　大槻文彦
發行者　東京市小石川區小日向水道町七十三番地　西野虎吉
發行者　大阪市東區北久寶寺町四丁目百六番屋敷　三木佐助
印刷者　東京市京橋區築地三丁目十五番地　野村宗十郎
發行所　東京市小石川區小日向水道町七十三番地　東京開成館（長距離加入）電話番町三五五番
發行所　大阪市東區心齋橋通北久寶寺町角　大阪開成館（長距離加入）電話東局八〇七番

正修日本文法教科書與附
毎冊定價金參拾錢


著作權所有

（株式會社東京築地活版製造所印刷）